781

特2[illegible]
883

文學博士 田中義能氏講述

皇道の使命と世界の將來

金刀比羅宮社務所文事課

始

帝國圖書館藏

特253
883

本書は昭和十四年八月二十三日金刀比羅宮圖書館に於ける國學院大學教授文學博士田中義能氏の講演を筆記せるものなり

昭和五十年
帝國圖書館藏

琴陵宮司挨拶

本日は炎暑の砌、多數御參集下さいました段感謝いたします。皆さんも御承知の通り、我が忠勇なる將兵諸君は、炎熱灼くがごとき支那の地に、將又滿ソ國境に、不撓不屈連戰連勝してゐるのでありますが、戰局の前途は尙遼遠であります。戰爭の相手は單に支那一國ではありません。支那の背後にある外國を相手にしてゐる。これは一体どういふ樣になるのでありませうか。ソ聯は繰返し繰返し滿洲の國境を侵犯して來る。この方面はどの樣になるのでありませうか。かう考へますと、前途は益々多難なのであります。然るに今回獨逸とソビエートとの間に不可侵條約が結ばれたと聞きます。この結果は、ソ聯はその全力を擧げて日本に向つて來る樣になるのではなからうか。今日では、世界の一角に出來たことも直ちに我が國にひゞいて來るのであります。この不可侵條約は、一体日本にどうひびいて來るでせうか……此の時に當り、本日こゝに、文學博士田中先生から「皇道の

使命と世界の將來」についてお話を伺ふことは甚だ幸であると思ひます。田中先生は、當地へは數度おいでになつてゐられますので、中にはお馴染の方もあると思ひます。どうか御清聽をお願ひ致します。

皇道の使命と世界の將來

文學博士　田中義能氏述

今回香川縣神職會に於かれまして、高松市で五日間講習會をお開きになりますので、私はその御依頼により參りましたのでありますが、この機會に於いて本日こゝに諸君に對し所懷を述べる事を得まするのは、私の光榮とする所で御座います。

私は講演に先だちまして、今次事變にお國の爲に一身をさゝげられました英靈に對し敬意を捧げると共に、酷寒炎熱の下に奮戰力闘せられる皇軍の勇士に感謝の意を表し、武運長久を祈る所のものであります。

扨これから「皇道の使命と世界の將來」との題下に少時所懷を申上げまして、御清聽の程をお願致します次第であります。

皇道と申すことは近來頻に申されまするので、諸君には既にその内容については、御承知の事とは存じますが、先づ順序として、御參考までに聊か私の考ふる所を申上ます。一体人間は何の爲に生活してゐるか、先づ第一にこの事を反省して見たいと思ひます。論語には、曾子は日に三度吾が身を省ると申してありますが、なか〳〵そういふことは、多くの人はしないと考へるのであります。併し自ら省みなくとも人の爲る事は、大體道理にかなつた行動をしてゐる。若し沒道理の行動をする人がありましたなら、それは狂人か何かであります。即ち自分のする事は皆意識して、すべきことを爲てゐる、考へてしてゐるのであります。手紙を出すにしても、郵便局へ持つて行つてポストに入れるといふ事は、即ち意識して行動してゐるのであります。けれども動物は殆んど無自覺的に行動してゐる、動物は殆んど考といふものがない。考があつても理想といふものがない。理想とは〝かうあるべきである〟〟かうなくてはならぬ〟といふ考へであります。たとへば字を書く、畫を描く、かういふ風に書きたい、もつとうまく描きたい、これが理想であります。動物は全

然、無自覺、無意識とは云へないかも知れませんが、少くとも理想と云ふものがありません。犬が餌を拾ふ。どうも不味かつた、この次にはもつと美味いものを拾ひたい。どうやつたらおいしいものを求められるか、又はおいしいものを造ることが出來るか、犬にはそんな考がない。行き當り次第に食べてそれですましてゐる。ところが人間には理想が伴ふからして、同じ食べるにしても、もつと榮養に富めるものを食べたい、もつと理想的なものが食べたいと考へる。勿論夢中で食べる人もある。何の爲に食べるのか考へない人もある。徒らに飽食煖衣で逸居して居るものもある。そこでソクラテスは、食はむが爲に生きるのではなく、生きる爲に食ふのであると云つて、一世を警醒した。日本には胃病のものが多いと云ふが、それは大抵この道理のわからない人と思ふ。即ち食ふのは生きるのが目的である。しからばよく生きる爲にはどんなものを食べればよいか、どんなものを食べるとよく生きるかを考へねばならぬのであります。ウドン一杯は牛乳一合以上の榮養價値があると研究されれば、牛乳のかはりにウドンを食べる。牛乳はバターにして海外に輸出せ

られる。現時の樣な外國資源を獲得せねばならぬ時代には、少しでもこれを海外に出さねばならぬ。そこでウドンは牛乳の代りになる。鰯一つと刺身一皿とは鰯の方に榮養價値がある。かくの如く榮養を研究して食べると能く生きることが出來る。能く生きてどうするのであるかと申しますと、そこで人は能く理想を實現することが出來ると云ふことになります。食物だけのことではありません。總ての事をよく考へて、そうして十分に理想を實現せんとするのが人間であります。

かゝる理想は階段的に進むものであります。小學校に入學する、入學當時は今迄理想であつた入學したことに滿足を感じる。學年が進むと今度は中學校に入學することを理想とする。中學校に入學する、初めはそれで滿足する、しかし上級になると更に高等學校へ、大學へと理想が進む。その樣に理想は階段的に進むもので、人類はこの理想によつて進歩發達するのであります。

それから理想は努力性を持つてゐる。努力奮闘以て理想を實現するのであります。理想は決して空想ではありません。空想には努力性がなく從つて現實性がない。そして理想は現實に不滿足を感じ、過去の種々の經驗に徵し、事實上より、より完全なる狀態を描いて進むのでありますから、當然實現性を有するのであります。

理想は人の性質、經驗、理性、想像等に基くので、自ら人によつて違ふ。卽ち政治家には政治家の理想があり、實業家には實業家の理想があり、敎育家には敎育家の理想がある。男子と女子とで亦その理想が違ふ。同じ男子の中、或は女子の中でも亦違ふ。かくて人によつて夫々違ふのであります。併し、人間として高所から見ると、その性質、經驗、理性、想像と云ふ風なのが略同一であるので、人間としての理想も略同一となり、爲に人生行爲の標準となるのであります。そこで西洋では昔からこの人間の理想はどんなものであらうかと、色々と研究し、色々の學說を唱へたのであります。その中でも、自我實現說、又は人格實現說といふ風な說が一番よいかと思ひます。卽ち「人間の理想は自我或は自分を實現することである」といふのであります。今日の自分は不十分である、明日の自分はより

良くしよう。今年の自分は不十分である、明年の自分は更に進んで十分なものにしようとするのであります。併しその自分卽ち自我或は人格といふものは色々に解釋せられます。西洋人は理論はともかく、實際は個人主義で、その自分は利己的になり勝であります。

理想は、已に人の性質、經驗、理性、想像等によつて夫々違ふのでありますから、人類といふ立場から離れて、國民と云ふ立場に於いて觀察しますると、又一國民としての性質、經驗、理性、想像等特殊のものを有するので、自ら一國民共通の理想と云ふものが出來るのであります。そこで日本國民には、日本國民としての理想があり、亞米利加國民には亞米利加國民としての理想があり、英吉利國民としては、英吉利國民の理想がありまして、夫々違ふのであります。されば日本國民は昔から日本國民としての理想を實現せんとしてゐる。日本國民のすべての行爲は日本國民としての理想を實現して來て居り、實現しつゝあり、實現せんとしてゐるのである。知つてゐると知らないとに拘らず常にしかしてゐるのである。これは全く恰も飯を食べるのと同じである。飯を食べるのは生きなければならない、生きて理想を實現せんが爲である。その理想は如何などと云ふことは、不問に附して、とに角食べるのであります。それと同樣に多くの日本人に「日本國民の理想は」と聞くと、なかなか答が出來ないものであります。それは自覺してゐないものもあるし、一言で云ひ表すことが出來ない爲でもある。勿論、考へれば色々と云へるのであるが、卒然云ひ表すことは困難である。所が國民の中には昔から色々すぐれた人がある。たとへば、ズット以前に、私の務めた學校で、運動會の時、職員レースといふのをやる。そんな時、私は足の長い人にはとてもかなはない。云ふまでもなく、足の長い人は走るのが極めて早いです。將棋でも碁でも、劍道でも柔道でも、強い人には弱いものはどうしても叶はぬ。そこで弱い人は、強い人を尊び、それを先生として尊敬する。これは何の道、何の藝でも同一である。その道、その藝の人であつて、それに關係ない人は格別尊敬しない。然るに日本國民の理想となると、それを自覺すると否とに關せず、當然にそれを實現せんとする精神が、あらゆる國民に生じ來るので、日本國民の理想を實現し、その方面に偉大なお方

は、苟くも日本國民である以上、すべてのものが之れを尊敬し、その行はれたる所、その示されたる事を模範とし、自分の云爲行動の規範とし、依つて以て國民の理想を實現せんとするのである。例へば乃木大將は、國民のすべてが尊敬する。勿論すべての人が乃木大將の樣には出來ないのであるが、少くとも乃木大將の御精神を體して進みたいと云ふ心が國民にあるからである。一例で云へば、吾々が東京で電車に乗るとする。東京の電車は殆んど常に滿員である。乃木大將は已に大將で伯爵である。當時こんな偉い方々は二頭立の馬車に乗つた。所が乃木大將は屢々電車に乗られる。しかも車掌臺の所に立つてゐられて中には入られない。昔の電車は、車掌臺から乗り降りする。この車掌臺の所に立つてゐられるのであるが、車掌も乃木大將には中におはいりなさいとは云はない。何故中には入られないか。乃木大將は、全國に寫眞版などでその肖像がくばられてあるから、一目見たら誰でも知つてゐる。それで中へは入られると誰でもすぐ立つて席を讓る。それが氣の毒であると思召されたものと見えて中には入られない。普通の人間は、乗車するとすぐ鵜の目鷹

の目で誰か立たぬかと見てゐる、席があいたらあつちからもこつちからも爭つてその席を占めんとする。乃木大將は決してかういふことをせられない。かういふ所に、神としての乃木大將と、人としての吾人國民との差があるのであります。尙乃木大將が、嘗て長野縣を旅行せられた際、路傍の或るさゝやかなる民家で腰をかけて休まれたことがある。するとその家からウナリ聲が聞える。聽くと主人が病氣だとのことである。素より貧しい家で着てゐる布團なども、極めて薄い。定めし寒からうと、乃木大將はお召になつてゐたマントを脱いで與へられた。勿論徽章などは皆とり去つて誰が着ても差支がない樣にして與へられた。普通の人でもかうしたいといふ心は持つてゐる。心はあつても遣つてしまつたら自分が困るといふので實行しない。そのかうしたい、かうあるべきだと思ふ所が、日本人の理想であります。自己を沒して敢へてこれを實行せられた所に、乃木大將の神としての偉大さが表現せられるのであります。

すべて大は義勇奉公から、小は區々一身上のことに關するまで、かう云ふ風な日本國民

の理想は、祖先の神々がお示しになつて居るのであります。そして又、日本國民の理想を體現せられた方々を、神様としてお宮に祀つて居るのであります。神々のお示しになつたこの日本國民の理想を實現する、その道筋が卽ち道であつて、皇道とは卽ちこの道であるのであります。皇は「すべらぎ」「すめらぎ」と讀みます。「すべらぎ」の意味は「統べらるゝ君」であります。我國を統治遊ばす君であります。古來、我が國の神々は、皆このすべらぎの大道を體現せられた御方であります。元來「君」と「神」とは同一の語であります。だから「すべらぎ」は神であり、君である。依つて「皇道」は「神道」であり、神道と皇道とは同一のものであります。

近來王道といふことがよく云はれる。林羅山先生は「我が朝は神國也。神道は乃ち王道也。一たび佛法興行してより、後、王道、神道都べて擺却し去る」（羅山文集）と云ひ、つまり王道と神道卽ち皇道とを同一のものと考へたのである。王道は「偏なく、黨なく、王道蕩々たり、黨なく、偏なく、王道平々たり」（周書洪範）など申して、王道は不偏不黨、中庸の大道であると云ふのである。この點が皇道とよく似てゐる。けれども王道は德を以て基としてゐる。受命といつて德あるものが天の命をうけて天子となる。これが王道思想の根幹である。皇道は萬世一系を根本不動の原則とするのである。德があるとか、ないとか云ふ段になると、今德の大なる人が、天命をうけて天子となつても、更に德の大なるものが出ると、こゝに革命といふことが現はれる。これは王道と皇道との根本的な相違である。その他の點に至つては、色々と相類してゐる所が、極めて多いのである。卽ち忠孝仁義の實踐躬行を要としてゐる點などであります。

道には使命がある。使命とは、その道の精神を徹底せしむることである。今度の事變は蔣介石が三民主義を主張し、學校で盛に抗日敎育をやり、三民主義の徹底を圖り、小學生などにも毎朝日本排斥の精神を敎へたり、すべて抗日侮日の擧動に出たのが起りである。皇軍の勇戰奮鬪によつて、頑迷なる蔣介石軍を打破り、占領地域も日本の二倍を超えてゐる。今や長期建設と云ふ時期となつたのであります。長期建設、それには皇道精神を徹底

せしめることが最も大切である。それには、第一に我々國民自らが、皇道精神をよく認識して、依つて以て、進んで長期建設に努力せねばならないと信ずるものであります。

三民主義とは何でありますか、支那には昔から王道がありまして、それは早く我が國にも入れられて、皇道の羽翼となり、前述の如く、甚だよい所の道であるのであります。三民主義は孫文によつて唱へられたものでありまして、卽ち民族主義、民權主義、民生主義この三つをいふのであります。これは孫文の新しい考への樣に思はれますが、實は米國から持つて來たものであります。亞米利加にリンカーンといふ大統領がありました。そのリンカーンが、人民の、人民によつての、人民の爲の政治といふことを唱へました。それを孫文が輸入したものであります。民族主義といふことは近來各方面で叫ばれてゐることで、日本民族は、日本民族主義でやるといふ風に、これは別段差支のないものであります。民權主義、これは自由、平等を主眼としてゐる。自由、平等も或程度までは許されるのであります。憲法などにも、人民の權利、義務などが規定せられて、ある點までは認められ

て居るのであります。併し、ある程度以上、或は絶對自由、平等などは到底認容せられません。社會主義などの申す自由などは、我が國體に反するのであります。次の民生主義といふのは、何とでも解釋のつく樣な文字でありますが、孫文は之れを社會主義、又は共產主義に解したのであります。勿論汪兆銘などは、防共主義を說いて居るやうですが、蔣介石の如きは、現に容共主義を主張して居るのであります。だから米國輸入の三民主義は、大いに修正しませんと、東亞新秩序には適しません。そこで支那には在來の王道の方がよいのであります。事變に日本の爲に敗れました蔣介石は、支那の民心をつなぐ爲に、孔子の子孫を曲阜から呼んで來て、抗日に利用してゐます。

何れにしても、今後我が國の處する道は非常に困難なものでありますが、是非共此の困難に打克つ必要があり、かくして我が國は、東洋永遠の平和、世界永久の平和を打立てることが出來るのであります。それには一体どうすればよいか、已に申しました通り、皇道を國民に徹底せしめる。それより他に道がないのであります。

皇道は萬世一系の皇統を戴いてゐる。この萬世一系の皇統を戴いてゐる皇道の使命は、東洋永遠の平和、世界永遠の平和を建設し、八紘一宇の大理想を實現するにあるのであります。

世界永遠の平和といふことは、西洋などでも云ふのでありますが、しかし西洋ではとても出來ぬのであります。何故かと云へば、彼等の國家は朝に興り夕に亡ぶのであるからであります。昔アレキサンダー大王は、四方を征服して、大王國を建設したのでありましたが、王一たび歿するや、その大國家は四分五裂、あはれはかないものとなりました。ローマ帝國亦當時各地を征服し、殆んど當時知られた全世界を征服し、ローマの滅亡は世界の滅亡であるとさへ豪語したのであります。而かしローマ人は、多くの殖民地から、山の樣に金銀財寶が流れ込んだ、その金銀財寶で、榮華の夢をむさぼつて居りまし間に、遂に北方の蠻族の爲に亡ぼされて仕舞つたのであります。後又カロロ大帝起り、大帝國を建設したのでありますが、大帝一たび死するに及んでは、その大帝國も全く亡びてしまつたのであ

ります。ナポレオン大帝の國家亦然りで、ウォータールーに一敗するや、又憐むべき狀態となつたのであります。今日强國といはれてゐる國家がいくつもありますが、いづれも皆以上の歴史をくり返へすものと思はれます。仮りに英國について見ましても、昔はローマに征服せられ、ローマから總督がいつて支配したのであります。ローマが滅亡しますと總督は勿論引上ました。然るにその後英國は、獨逸の方のアングロ・サクソン人の征服を蒙りました。イングランドは、アングロ人の國と云ふ意味だと云はれて居ります。併し、それがしばらく續きますと、今度はデンマークのカヌート大王の爲に征服せられ、それが又暫くするとノルマンディー侯ウヰリアマの爲に侵略せられ、國家を建設せられたのであります。この樣に、今日の强國、英、米、獨、佛その他の列國の歴史から見まして、興亡常ならないのでありますから、今强大をほこる某大國でも、一兩年の間に滅亡して仕舞ふかも知れません。實に海外諸强國の運命ほど、はかり知られないものはありません。それでゐて、どうして世界永久の平和の建設などが云はれませうか。痴人の夢を語るやうなもの

であります。

かゝる世界列國の興亡常ならない中に、世界無比の皇道に基き、萬世一系の皇統をいただき、金甌無缺の國家をもつて、獨り興隆と發展の歴史を有する、我が大日本帝國のみ、世界永遠の平和を建設し、八紘一宇の大理想實現の使命を有するのであります。卽ち世界永遠の平和は我が皇道の使命であるのであります。

皇道は右の如く、天壤無窮の皇運を扶翼して、その使命を達成せんとするものでありまして、その爲に、人生に於いて躬行實踐すべき種々の道を有するのであります。その第一に擧ぐべきは、敬神崇祖であります。敬神崇祖は外國にはない所のものであります。その敬神崇祖の根本義はと云へば、卽ち報本反始であります。本にむくいることであり、恩義に感謝することであります。恩を感ずるといふことは非常に大切で「恩を知らざるは禽獸に等し」と云ふ位であります。所が西洋ではあまり恩を感ずることを彼れ此れ申しません。大正三年勃發の歐洲大戰の時の事ですが、郵船會社の船が盛に歐洲へ航海しました。その

當時の船長は多く西洋人であります。つまり日本人船長には、歐米人から、歐米の航路を乘切るといふ信用があまりなかつたのであります。しかるに偶々此の戰役の際、日本人船長の船がたくみに航海するのを見て、西洋人は全く驚いてしまつた。それで日本人の航海術は決して西洋人に讓るものではないと云ふ信用が出來たので、今日郵船會社の船長は、全部日本人といふことである。そこでその當時の大戰の時、英國人が船長をしてゐた船が地中海とかで擊沈せられて、船長が死んでしまつた。その船に乘組んでゐて、幸に助かつた日本人が、後日記念品をこしらへて、英國にある日本大使館を經て、もとの船長の夫人へ贈つた。所がその船長の夫人が、それを受取らない。夫は郵船會社の使用人である、日本人乘組員も同じ會社の使用人である。どちらも會社から給料を貰つてゐる。給料を貰つてゐる使用人から、給料を貰つてゐる使用人が、物を戴く理由がないといつて受取らない。大使館員も大いにてこずつたが、懇々と日本皇道の恩義のことを說明し、船長の恩義に報いる爲に記念品を贈るのだと、十分に說明したら、夫人は非常に感激して、それは誠に有

がたい事であるとよろこんで受取つたといふのであります。斯樣に西洋人には恩といふことが中々理解出來ないのであります。總てが物質主義でありますから、精神的のことは容易に理解出來ないのであります。我が國には、昔から幾多の神々が出現せられて、かゝるめでたき國家を建設なされ、發展なされたのであります。これに對し吾々は常に大いなる感謝の念をさゝげ、之れを神社に奉齋し、その祭祀を怠らないのであります。之れが報本反始であります。

それから皇道に於いて大切なことは、人生のすべての行動を、至誠で一貫することであります。皇道では、昔から明き、清き、直き、マコトの心、卽ち至誠一貫を高調して居るのであります。本居宣長先生は「生れなからのま心そ道にはありける」と申されてゐる。卽ちマコトの心、眞心そのものが、皇道の本質をなしてゐるのであります。人の心は、平素はとかく利慾にとらはれ勝でありますが、一たび神明の前へ出ますると、自然にその心が至誠になるのであります。これは日本人だけではなく、外國人もその感じを懷くと思はれます。嘗て獨逸や、伊太利の使節團など云ふのが來朝しまして、明治神宮、靖國神社に參拜しまして、「我々ははじめて日本精神を知つたやうな感じを抱いた」と申しましたさうですが、外國人でも、神前に出れば、自ら至誠の眞髓に觸れるものと思はれます。まして日本人たるものに於いてをやであります。菅原道眞公の歌といふのに

心たに誠の道にかなひなは祈らすとても神や守らん

といふのがあります。尤もこの歌は菅公のではないともいひ、疑問とせられて居りますが、或人が、私は誠の心で生活してゐる、されば、此の歌の通りで、神樣には參らなくとも宜しいと考へますが、如何でせうと質問致しました。併し私は、それは宜しくないと申しました。何故であるかと申しますると、一體神樣に參るのは、卽ち敬神崇祖は、神樣に徒らに一己の利益幸福を祈るためでは無いのであります。第一に肇國以來、かゝる世界無比の國家を肇められ、發展せられましたことを、神樣に對して感謝するのであります。報本反始であります。次に皇道の無限の發展を祈るのであります。卽ち至誠を致して神明に歸一

するのであります。此の爲に神社參拜が大切になるのであります。唯々區々たる一身を守つていたゞいて、一己の利益幸福を祈るといふ風なものではないのであります。

目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけれ

明治天皇は御製にかく仰せられてあります。目に見えぬ神を拜む、その心が誠の心なのであります。神前にはよく鏡が置かれてある。鏡を以て御神體とせられてゐる所も多いのであります。伊勢の皇大神宮の御神體は神鏡でありますことは、申すも畏き極みであります。鏡は至誠を表現してゐます。鏡には僞がありません。人間の目は誠を映すことが出來ない場合が多いのでありますが、鏡はそのまゝを映します。卽ち誠をうつすのであります。處が若し人間が至誠となりますれば、神樣の鏡と自分の鏡とが一致するのであります。そこが卽ち御製の聖旨でありますと拜察出來ます。誠は總てのものの根本であります。本居先生の「生れなからのま心そ道にはありける」と申されたのは、これであります。

そこで皇道では至誠を以つて敬神崇祖をする。神社に參拜すると云ふことが大切であるのであります。皇道では、この神樣に參りまするには、その前にお祓といふものを致します。或はみそぎと云ふものを致します。先刻伺つたのでありますが、この金刀比羅宮にも、東の祓川で參拜者がみそぎをして參拜したといふことであります 祓は禊の簡單なもので、祓には水を要しません。みそぎには水が要ります。身をそそぐのであります。神代の昔、伊邪那岐神樣が、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原で禊を遊ばされた。これが禊の起源であると考へられます。現に神樣にお參りする前には、手を洗ひ口をそゝぐ、つまりみそぎの簡略化されたものであります。日本國民の國民精神は、この禊祓の精神に於いて、特色を發揮するのであります。此の精神の極致が、前に申しました至誠でありまして、神樣と一致するのであります。先年日本のある製紙會社が、英吉利の會社へ、製紙機械を註文しました。所が、英吉利の會社から機械を發送して、この機械は非常に精巧だから、据付の爲に技師を派遣するから、それまで据付けるのを待てと云つて來ました。そこでこちらの會社の社長が、その會社の技師を招んで云ひまするのに、今度英吉利から製紙機械を送

つて來るについて、その据付の爲に技師を派遣すると云つて來た、所で諸君が、刀鍛冶が日本刀を鍛へる時、身を清め、仕事場を神聖にして鍛へる。あの心を以つて据付をしたら出來ると思ふがどうであらうと云ひましたら、技師は、やりませうといふことになつた。日本刀は御承知の通り神聖なものである。鎌倉時代に皇室の御物となる刀を、全國十八人の刀鍛冶に仰せつけてうたせられ、そのうち最も優れた刀を御物とすることになりました、そこで出來上つた刀を比較研究して、相州の正宗の鍛へた刀が當選して御物になつた。處が越中國に郷義弘といふ刀鍛冶があつて、この十八人の中に入つてゐたが、十分自信を持つてゐたのに、それが落ちた。そこで義弘は考へた、これは正宗が運動したに相違ない、怪しからん奴だ、ヨーシ一つ一騎打をしてやらう、乃ち決闘をしようと考へました。で、遙々鎌倉までやつて來て、ひそかに正宗の家の樣子をうかゞつた。そつと穴から正宗の家の中をのぞくと、正宗は衣冠に身を正して刀を鍛へてゐた。弟子もちやんと裝束をつけてゐる。義弘といふ人はちと亂暴な性の人であるが、これを見て大いに感動して、その翌日

禮服を身につけて正宗の家にゆき、罪を謝してその弟子になつた。實に刀はよく切れるだけでなく、魂がこもつてゐる。そういふ風に神聖にして、日本刀は出來るのであります。

こんなわけで、この精神で以つて製紙機械の据付をやることになつた。そこで英吉利の方へは、電報で技師を派遣に及ばぬと謝絶つたのであります。けれども英吉利の會社では、据付が惡い爲に機械の調子が惡くては、會社の面目にも關するからと云ふので、技師を派遣して來た。こちらは据付をどん〳〵進行させて、もう二三日で試運轉をやるところまでになつた時、英吉利の技師が到着しました。そして、据付狀態を一目見て、「私は本國へ歸ります」と云ふ。折角來たのだから、もう二三日待つて据付が完了するのを見て歸つて欲しい、そして据付の結果を本國の方へ報告して欲しいと、種々引留めても「イヤ私はもう歸ります」と云つて歸つてしまつた。所で英吉利の技師が本國へ歸つて、社長に歸國の旨を報告しまするとと、社長は何故据付を見ないで歸つたかとの質問に對し、技師は「全く必要がありませんでした。私が自分で据付けましても、日本人技師以上の据付はとても出

來ません」と云つたさうであります。この据付に當つた日本人技師の精神、これが日本精神であります。

獨逸のヒットラーは、初めは日本人に對する認識が、甚だ不十分で、日本人は人眞似ばかり上手で、仮りに十年間西洋文明を日本に入れないやうにすれば、日本は德川時代の野蠻に歸ると云ひました。所が先年獨逸で開かれたオリンピック大會の時、ヒットラーが日本人選手の高尙なる武士道的態度を見て、全く感心しました。かくて、彼の日本に對する認識を大いに修正したのであります。元來日本人は決してそんな眞似ばかりする國民ではないのであります。卽ち機械を作るだけの力があるから、据付も完全にやれるのである。學問にしても、文字は支那から輸入したのであるが、別に仮名を發明してゐる。文章は全く日本の創造で、それは支那人にもすぐは讀めません。儒教などでも日本に來て、皇道に立脚して日本に擴まつたのであります。その外日本には國文學といふ立派な學問が創造せられてゐます。宗教にしても、佛教、キリスト教等、日本の佛教、日本のキリスト教として發達してゐる。技術にしても日本建築は特別に創造せられてゐる。勿論耐震耐火とは云へないが、住み心地は、實に申分ないのである。服裝でも、洋服も便利ではあるが、何と云つても日本服は日本人に氣持がよい、又特徵を持つてゐる。日本婦人の髮は日本人の發明である。科學にしても、野口英世博士の樣な發明がある。長岡半太郎博士の水銀から金を採る發明がある。昔から金を作るのには、各國の人が非常に苦心したものである。然るにそれを長岡博士は完成した。殊にすぐれたものには美術がある。日本の繪畫、彫刻等は頗る優美である。日本の某洋畫家が佛蘭西に留學して、佛蘭西の大畫家ヴラマンク氏に就いて學んだ。或日ヴラマンク氏が、「貴君は日本から何の爲に佛蘭西に留學に來たか」とたづねた。「日本にはよい先生がないから留學に來たのです」と答へた。すると、ヴラマンク氏は、「それは考が違つてゐる、私が多年先生として研究してゐるものを見せよう」と云つて示したものは、蕪村や大雅の描いた畫の畫帖であつた。ヴラマンク氏は、かくて告げて「藝術は死せず。日本獨特の大藝術がある。予も蕪村や大雅の境地に達せんと日夜

努力してゐる」と云つたので、彼の洋書家は一言もなく赤面したといふことである。そう云ふ譯で、日本は決して西洋の眞似ばかりしてゐるのではありません。滿洲事變以來盛に叫ばれた日本精神、無比の國體、これ等は、實に皇道に由來するもので、皇道は日本の創造したものであるのであります。これを實現する爲には、神意を奉體することが最も大切な次第であります。

皇道の使命を達成しまする爲に、躬行實踐すべき道として、更に注意すべきは家族制度であります。家族制度は、伊邪那岐、伊邪那美二柱の神樣が立てられたものであることは、皆樣御承知の通りであります。この制度は、小にしては一家、大にしては國家となるものであります。一家に於いては親に對する孝が根本になつてくる。論語に「孟懿子問フレ孝ヲ子曰ハク無レ違フコト。樊遲御タリ子告ゲテ之レニ曰ハク、孟孫問フ孝ヲ我レニ。我レ對ヘテ曰ハク無レシト違フ。樊遲曰ハク何ノ謂ゾヤ也。子曰ハク生ケルニハ事ルルニ之ニ以テシ禮ヲ、死セルニハ葬ルニ之ヲ以テシ禮ヲ祭ルニ之ヲ以テス禮。」とあります。卽ち孟懿子が孔子に向つて、孝行のことを問ふた、孔子は違ふなかれと敎へた。

孔子は孟懿子が更に何か問ふであらうと思つてゐられると、孟懿子はそのまゝ去つた。孔子が外に出て、馬車に乘ると、その弟子の一人樊遲が御者になつてゐた。そこで孔子は樊遲に、今孟懿子が孝行の事を自分に問ふたので、違ふ無れと答へたと話した。樊遲は孟懿子より學問がすぐれて居るので、この意味の十分判らないやうな話を聞いて、それで滿足しないで、それは何の事ですかと問ふた。孔子は、生きてゐられるときは、之れに事へるのに禮を以てし、亡くなられたら之れを葬るに禮を以てし、之れをお祭りするのに禮を以てするのだと答へた。孟懿子は魯の大夫の家であつて、孟懿子が違ふ無れを、何でも親の云ふ通りにすれば良いと解したのでは間違が出來るから、樊遲の質問をよい機會として、孟懿子を始め、皆のものの誤解しない樣にさせようとしたのであります。子夏が孝をたづねると孔子は、「色難シ。有レバ事弟子服シ其ノ勞ニ、有レバ酒食ニ、先生ニ饌ス。曾テ是ヲ以テ爲ス孝ト乎」と云ひ、一言色難しと答へられた。これは何時も和やかな色を以てしなければならない。何時もニコ〳〵して居れ、ふくれ面をするな。事があつたら子弟たるもの先づその勞

に服する、御馳走があつたら先づ父兄に差上げる、が、これだけでは孝行にはならぬ。先づ親に對する誠心誠意で、親愛の情面に表れ、顏色を和げることが大切であるといはれた。子游が孝をたづねた。孔子が答へて云ふのには、「今之孝ノ者、是ヲ謂フ能ク養フ一。至ルマデ於犬馬ニ皆能ク有リ養フ。不レバ敬セ何ヲ以テ別タンヤ乎。」と云ひ、現今の孝行は、能く親を養ふのを以て孝行としてゐるが、養ふだけなら犬や馬も同じことである。敬といふものがなかつたら、犬馬を養ふのと何の區別もないのであると云つた。尊敬しなければ孝にはならぬと云ふのである。孔子の孝の說明はかやうに色々となつてゐる。勿論、孝行の仕方は色々ある。併し孔子は、子貢の一言以て終身行ふべきものを問ふたのに對し、「それ恕か」と答へたのであるが、孝行も一言以て孝を云へば、私は、親の意志を尊重することであると云ひたいのであります。たとひ親をして、金殿玉樓に住まはしめ、美衣美食に飽かしめましても、親の意志に背けば決して孝行とはなりません。卽ち如何なることをしても、親の意志を尊重し、親の意志を繼承するのでなくては孝行とはならないのであります。所で、親の意志と云ひましても、卒然親に向ひ、その意志の如何なるかを尋ねましても、直に答へられないかも知れません。併し、親は本來孝子でありましたので、その親の意志を奉じて居られた筈です。そんな具合に、親からその親に及びますので、結局親の意志は祖先の意志なのであります。我々の祖先の意志は如何と申しますと、そは悉く皇道を奉體し、敬神崇祖の念に厚く、盡忠報國の至誠を致すを意志として來たのであります。私どもが、今日かく陛下の臣民として存在しまするのは、最もよく之を證明して居るのであります。萬々一私どもの祖先に、皇道を守らないものがあつたとしましたなら、私どもは今日存在しないのであります。何となれば、難波大助のやうな反皇道者は、子孫を殘さないからであります。平重盛は、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずと云ひ、父清盛の意志に反した樣でありますが、併し事實はさうでないのであります。清盛が後白河法皇を鳥羽の宮に遷し奉らんと致しまして、軍勢を集めました時、重盛は內大臣の服裝で清盛の邸に行きました。宗盛が、この一大事の時に文官の服裝で來られるとはどうした事かと詰る

と、重盛は睨みつけて、お前は何の爲に武裝してゐるか、敵はどこに居るか。吾は大臣大將である。賊があつて宮闕を侵す場合の外、敢へて武裝しないのであると、いたく宗盛らを叱りつけて屋内に進んだ。清盛は遙かに重盛を見て、あわてゝ法衣を鎧の上からまとひ、頻に鎧をかくさうとした。重盛は清盛に向つて、私は尊貌を拜見しまするに、家運がもはや傾きかけてゐる樣に思はれます。私は世に四恩といふものがあり、就中皇室の恩が最も重いと聞いて居ります。今平家一門は、たとひ聊か功績があつたと致しましても、日本の半を領有して、大人は太政大臣の榮位に陞り、兒の不肖を以てして、且つ大臣大將を辱うし、宗族皆榮爵を辱うしてゐるのであります。これ全く皇室の御恩を蒙ることの極めて大なるものであります。今、已に讒人は捕へられたのであります。何を苦しんでこんなことをなされるのでありますか。若し御志を遂げようとなさるならば、先づ重盛の首を刎ねてそれからにせられたいと、懇々と諫めたのであります。清盛は、淨海（清盛の法名）衰老の身を以て此の擧をなすは、我が一門を慮るのみである。然るに汝は我が家の嫡子、而して汝がさういふ考なら、萬事は汝に任すから宜敷く處置をせよと云つて、そのまゝ奥へ引込んでしまつた。重盛はこの時忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、重盛が進退こゝに窮まれりと云つたといふが、果してさう云つたかどうかは、歴史家の問題ですが、こゝで重盛が父の意志に背いて、不孝をしたかの如く思はれる。併しこゝは能く考へねばならぬ。清盛の子、貞盛は、皇室に忠にして、逆賊平將門を征し、鎭守府將軍に任せられ、その子孫正盛詔を受けて追討使となり、源義親の叛を平げ、その子忠盛は、卽ち清盛の父で、白河、鳥羽二上皇に仕へ奉り、忠誠を致したのであるが、殊に鳥羽上皇は、「忠盛意を用うることまことに苦しめり。死を以て君を衞る」と宣ふたのである。かゝる忠誠の精神は清盛の父忠盛の意志である。清盛亦之れを繼いで居るのである。唯、一時の忿怒の情に驅られて、この擧に出でんとしたのである。重盛は祖先の意志をつぎ、皇室に忠誠を致し、又、父をして一旦の怒の爲に大逆に陷らしめなかつたのは孝を全うしたのである。卽ち忠孝を全うしたのであります。かくて祖先の志をつぐことは、卽ち忠で

あり、孝である。忠孝一本、これは實に家族制度の我が國にのみ見らるゝ現象で、皇道の特色である。我々はこれを以て世界の將來に處して行かねばならぬのであります。

色々と皇道に就いて述べましたが、尙その內容をなすものは、神ながらの精神であると云ふことが出來るのであります。神ながらとは、日本書紀の孝德天皇の條に、惟神と云ふ文字で示してあります。

西洋では何でも物をするのを義務といつて居ります。カントも「道德は義務の爲に義務をするのである」といつて居ります。この言葉は我が國にも輸入せられ、義務敎育とか、納稅の義務とか、兵役の義務とか申します。しかしこれはあまり面白い言葉ではない。若し將來改めるならば、私は道と改めて欲しいと思ひます。納稅の道、兵役の道といふ風にしたいと思ひます。納稅でもいや〳〵納めて、そしてこれで義務がすんだなどといふ言葉は誠によくないのであります。旅順でのステッセルも、我が義務はすんだと考へて白旗を立てた。日本のやうに城を枕にして討死の覺悟で戰はるれば、日本の方にも又損害が多か

つたであろうが、義務がすんだといふ考へで、白旗を立てたのは、日本の爲にはよかつたが、いかにも西洋的である。日本海々戰のとき、敵の司令長官ロジエストウエンスキーが小さい船で逃げるとき、この船に白旗が有るか無いかと問ふた。自分の義務がすんだのだから、白旗を立てゝもよいのであるといふ考である。トラファルガーの海戰のとき、英吉利の提督ネルソンが「イギリスの國家は各員の義務を盡すを期待す」と信號を揭げた。義務と云ふのである。そして、大戰も英吉利の勝利で終らんとする頃、佛蘭西の軍艦が白旗を立てゝ近寄つて來たので、降參したものは擊つなとめたが、この佛蘭西の軍艦は、ネルソンの旗艦に近づいて、突然物蔭からネルソンをねらひ擊ちした。ネルソンは負傷した。直に下方の船室に伴ひ、治療を加へたが、如何せん致命傷である。ネルソンの最後の言葉は、「神よ！ 私は私の義務を盡した。」と云ふのである。ネルソンは世界的勇將として尊敬せられ、その死ぬ時の言葉は非常に名高いものである。かくの如く西洋では何でも義務である。義務と云ふのである。楠正成公は湊川で戰死せられた。その時「七度人間に生れ

て此の賊を亡さん」といつてゐる。これを西洋人の義務を盡したと云ふのに比較すれば、その差如何。若し西洋人なら、早く已に「我は我が義務をつくした」といふ譯で、足利尊氏の軍門に降を請ふと云ふ次第であらう。尊氏は正成が降參して來たと聞くと、降者を優遇する彼れの政策から見て、彼れは正成を攝、河、泉三州の大守としたに相違ない。併し、正成は斷乎として七生報國を盟つて戰死したのである。これが皇道の精神なのであり、惟神の道であり、我々が今日尙楠公の忠誠を尊ぶ所以なのであります。東郷大將は日本海々戰の時「皇國の興廢此の一戰にあり各員一層奮勵努力せよ」の信號を發せられました。皇國の興廢此の一戰にありと云ふ言葉は、我々日本人には、今日尙血湧き肉躍るの感が致すのであります。我々は以上の如き皇道の精神で以て、東亞新秩序を建設し、八紘一宇の大理想を實現せねばなりません。これ實に日本人の進むべき方針であつて、卽ち皇道の使命なのであります。

先刻宮司樣からお話がありました樣に、獨逸はソ聯と不可侵條約を締結しました。長い

間我が國と防共協定をなし、殆んど同盟國の樣にしたゐた獨逸は、その敵國の如きソ聯と同盟のやうな風になつて來たのであります。國際間には殆んど信義も、道德もない樣な有樣であります。國際間の關係は實に明日のことは計られないのであります。全く一時の利害關係にのみよつて動くといふやり方であります。西洋人のやり方は實にこの通りなのであります。こんな國際間に立つ我が國は、誠に戰國時代に遭遇してゐる樣なもので、今後我が國は如何なる難局に立つかわかりません。今日でこそ獨逸とソ聯が結び、英佛に當りましても、この調子では、いつ如何にして、獨逸とソ聯が英佛と結び、東洋に臨むかわかりません。或はこれ等の一國が、歐洲に覇を唱へ、東洋に勢力を及ぼすかわかりません。何れにしても、私は、世界の將來は、白人の世界と我が皇國との決戰に立至るかと思はれてなりません。さう云ふ風にならねば、至幸でありますが、東京・羅馬・伯林の樞軸は、比較的鞏固なものと思ひましたが、實にあてになりませんでした。かう云ふ次第で、世界の將來は豫測を許しません。今後我が國は如何なる難局に立つかわかりません。されど我

が國は、如何なる難局に立つても、之を突破して、皇道の使命達成に邁進せねばならないのであります。熊澤蕃山の歌に

うきことのなほ此の上に積れかし限りある身の力ためさん

と云ふのがあります。我々はこの精神を以て、如何なる國際難局が出來ても之を突破して進まねばなりません。皇道はかんながらの道で、かんながらは惟神と書かれます。コレ神、卽ち神としての活動がかんながらであります。前線に戰つてゐられる皇軍將士が、一身を捧げて奮鬪される樣は、これ神で、卽ち神であります。義務などゝいふ觀念はその間に少しもない。「私は私の義務を盡した」といふ風な考は毛頭なく、敵彈に斃れ命が絶える際にも「天皇陛下萬歲」を絶叫して死ぬのであります。我が國民の身体の中には、祖先から嫡々受けついだ神明が宿られるのである。されど多くの人は、動物である所の肉體に制せられて、その神明をかくしまつりて、恰も動物であるかの如く行動して居る。されど我々はその動物性を制御して、神として活躍せねばならぬ。神として活躍すれば、そこに「神ながら」が實現する。神そのものゝ活躍である。此の場合に動物的利己心などは現れないのである。前線の將士が、一死以て天皇陛下に至誠を致す刹那は、既に神であります。銃後の國民も亦至誠以て神として行動せねばならぬ。そこが矢張り神ながらである。最も恐るべきは內から出る墮落の心である。油斷の心である。動物としてのさもしい心である。如何に前線の將士が勇敢に働いても、銃後の國民が弛緩して來てはゆゝしき大事となる。この難局を突破しまするには、動物的では駄目であります。西洋で云ふ「アルプスの上にアルプス」とも云ふべきこの難局を突破しまするには、前線と共に銃後も亦神ながらであらねばならないのであります。

我々の先輩は、かつて東洋の大帝國である支那を討ち、西洋の大帝國ロシアを討ちました。是れ皆皇道、神ながらの大道に基いたが爲であります。今や蔣介石を膺懲して東亞新秩序の建設に努力して居るのでありますが、蔣介石には後押がついてゐます。仲哀天皇は熊襲を征せられたのでありますが、熊襲には新羅といふ後押があつた。そこで神功皇后は

我々の祖先を率ゐ給ひて、海を渡つてこれを征討遊されて禍根を除かれたのであります。又弘安の役には、元は百戰練磨の大軍を以て入寇して、敵前上陸をしようとしました。之れに對し、我々の祖先は、神ながらの精神を發揮して、生きて歸るもの僅かに三人ならしめたのであります。されば、今後も、このかんながらの精神を振興して、日本民族傳統の偉力を發揮して、今後の大難局を突破し、上は宸襟を安んじ奉り、下は我々祖先の遺志を繼承し、皇道の使命を完成しなければならぬと思ふものであります。

私の話はこれで終ることに致します。御清聽を感謝致します。

（終）

397
266

昭和十四年十二月廿五日印刷
昭和十五年一月一日發行

編輯兼發行者　金刀比羅宮社務所文事課
右代表者　琴陵光重　香川縣仲多度郡琴平町七一五番戸
印刷者　小野秀八　香川縣仲多度郡琴平町一八六番地
印刷所　小野印刷所　香川縣仲多度郡琴平町一八六番地

終